

私の新たな一歩

宮古市立第一中学校二年 山口怜己

家族。それはとても大切なものです。しかし、時には激しく言い合ったり、心のすれ違いから信頼関係が崩壊することもあります。東日本大震災。多くの人々が犠牲になりました。私の家族は、あのような状況の中、皆無事で、あの時は命の大切さと家族がいるありがたみを強く感じました。

それから約二年半。私は中学二年生になり

ました。部活や勉強を精一杯がんばっています。しかし、思春期に入り、つい親に反抗し、親の一言一言に腹が立って、もう自分がいきました。

ある日の出来事です。学校でやってはいけないことをしてしまい、親にしかられ、反省の証として大切なものを没収されてしまったのです。私は反省の気持ちよりも怒りで頭がいっぱいになりました。

それから二週間、親の顔など正直見たくあ

りませんでした。声も聞きたくありませんでした。いろんなことを制限され、ささいなことを細かく話しかけてくるからです。顔色悪いなどと言われても、心配してくれて、いるのだと思うことなどありませんでした。そんな時、父が私に話しかけてきました。お父さん、お母さんは好きで、怜己にきつくしていると思うのか。でも、私は、まともな返事を返すことができませんでした。

正直、分かっているのです。私のことを

心配してのことだということを。私に気づいてほしくてやっていることを。でも、何が言いたいのか？私に何を求めているのか？などという反抗的な感情が、心の中の大部分を占めてしまっていた。いつもは父の背中が大きくて、堂々として、いるのに、その時は本当に小さく、弱々しく見えしました。それから、反抗的な気持ちに打ち勝つことができない日々が続きました。

何日かた、た日のことです。またも、両親
 と言ひ合ひいになつてしまひました。自分の感
 情をフントワイルでさす、売り言葉に買い言
 葉で、私は家を飛び出してしまつたのです。
 家を出ても行くあてもなく、近くの祖母の家
 に行きました。

家出してきた、という私に、心配そうに声
 をかけてくれる祖父。

それから、祖父母に今までの事を話しまし
 た。親身になつて聞いてくれる二人に、さる

で操られてでもいるかのように、すらすらと
 それまでの金てを話すことかできました。話
 を金で聞いてから、祖父と祖母は言ひました。
 「怜己は、中学生になつたから、良いことと
 悪いことは分かるよね。だから、良くないこ
 とはしないんだよ。おいしいちゃんから、お父
 さん、お母さんに話をする。でも、怜己に対
 して怒つたり細かいことを言うのも、将来
 怜己がちゃんと生きていけるように言つてく
 れていることなんだよ。怜己が嫌なわけない。

心配してくれているんだ。その裏側にある優しさは気づいてほしい。

この時、父の言葉が頭をよぎりました。この前、父が話してくれたことと同じでした。心の奥にあった前向きで素直な思いが、反抗心を押さえ、怒りはいつの間にか消えていきました。

大事なことを忘れてた。ちゃんとお父さんお母さんには謝る。ありがとう。

その時、ちょうど父と母が心配して探しに

来てくれました。

心配かけてしまって、ごめんなさい。

素直に謝る私に、父と母はこう一言言いました。

「分か、だから……帰ろう。」

それからの私は、手伝いをしたり、言葉遣いに気をつけて生活しています。今回の出来事は決して良いこととは言えませんが、私にとって、大切なことに気づかされたいい経験

になりました。

震災直後に抱いた家族のありがたさも、また、よみがえってききました。これからもまた、間違っただことをして、しかられたり、言い合っ
いになってしまいかもしれません。でも、親の
の思いを知ることでできた今、もうだいじやうぶな
うぶな気がします。私の生き方の心配をしてく
くれている親を大切にしたいと思っています。
あの日から私の新たな一歩を踏み出された
めの日だったと思います。自分にとって

厳しいことはこれから多くあるかもしれ
せん。でも私は、そういう時は、その裏側を
考えてみようと思います。あの日感じた、厳
しさの裏にある優しさのようなものが見つか
るかもしれません。

私にとって大切な家族、祖父と祖母がいる
幸せ。

私の一歩は、家族みんなへのありがたうの
一歩です。